

富山湾周辺地域の漁業用具の基礎的研究事業

和船建造技術を後世に伝える会

はじめに

当会は、廃絶が危惧される木造和船とその建造技術の記録・収集、及び調査・研究を通して和船とその建造技術、また和船にまつわる事象（歴史・習俗・漁撈・舟運等）について調査・研究し、後世に伝承していくことを目的に活動している。これまで、『船をつくる、つたえる』、『氷見の和船』、『とやまの和船』の 3 冊の調査報告書を刊行し、富山県でかつて用いられた和船についての調査成果の公開に努めてきた。

平成 23 年度は、富山湾周辺地域の漁業用具の基礎的研究ということで、和船のみに限定せず、広く富山湾沿岸地域で使用された漁業関係の資料（網漁関係用具、釣漁関係用具、磯漁関係用具、加工用具、信仰用具、操船関係用具、船舶関係用具、造船用具等）の基礎調査を目的とした。

（1）氷見市内と近隣地域に現存する漁業用具の現況把握と収集

氷見市内の櫓大工道具 155 点を収集し目録を作成したほか、能登半島で使用された漁撈関係の資料の寄贈を受けた。

実地調査としては、平成 23 年度で閉校となる富山県立海洋高等学校の資料室に保管されている、かつての富山県水産講習所以来の資料について調査を行った。注目すべき資料として、昭和 10 年代頃の木造船の図面 2 点があり、借用して詳細な分析を行った。あわせて海洋高校にて実習用に用いられた櫓と櫓の寄贈を受けた。

氷見市内の漁業用具としては、藪田漁港の漁具倉庫に放置してあった木造船テンマの所有者と連絡をとることができ、寄贈を受けることになった。このテンマは、当会で把握している市内に現存する海船としては、現役船をのぞいて最後の 1 艘である。テンマの状態は、比較的良いものではあったが、風雨が当たる部分の朽損・劣化が著しい。そこで、朽損した船底回りについてはFRP（繊維強化プラスチック）を用いた最小限の補強を施し、欠落した部品の新造を行った。

また、収集資料の整理用ラベルを新たに印刷し、収集した漁撈用具の整理作業に供した。

（2）日本海沿岸に特徴的な操船用具「丸櫓」についての把握・調査

若狭湾から富山湾にかけての日本海沿岸地域では、オモキ造りの木造船と結びつく操船用具として「鵜の首櫓」と呼ばれる特徴的な櫓が使われてきた。氷見や能登灘浦では通常用いられる平櫓と対比して丸櫓と称し、また先端の握りの形状からカラスクビとも呼ばれ、定置網の網船ドブネの艫櫓として用いられた。

今年度は、石川県かほく市のうみっくらんど七塚海と渚の博物館で所蔵される能登半島の丸櫓につい

て資料調査を行った。また氷見市大境地内より、粗木取りした状態で保管してあった丸櫓の未成品を収集した。収集した丸櫓未成品は先端の握り部分が欠損する。残存する丸櫓も先端が欠損するものが多く、破損しやすい部位だったとみられる。そうした際のスペアとして、未成品がストックしてあった可能性も考えられよう。

また、県内の資料としては、魚津市、入善町等で使用された丸櫓の資料調査を行った。鵜の首櫓の分布域からすると東端となるこの地域では、オモキ造りの木造船ではなく、二枚棚構造の船に平櫓と併用してしようされるという特徴がある。この丸櫓については、今後も調査・研究を続けていきたいと考えている。

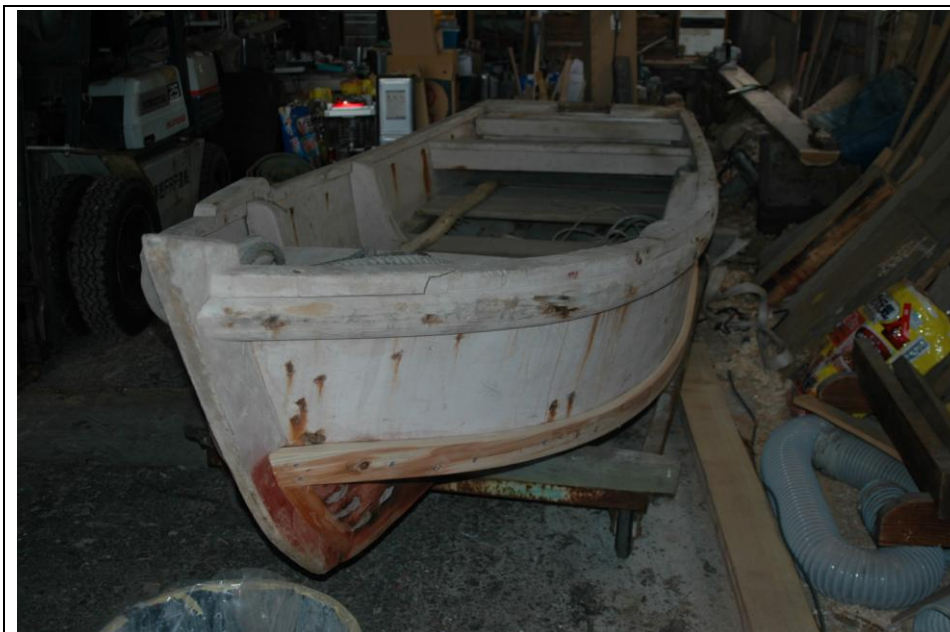
(3) 各博物館・資料館における漁業用具の収蔵・整理状況の把握・調査

山口県周防大島町の東和収蔵庫（国指定重要有形民俗文化財「周防大島東部の生産用具」）、同周防大島町の久賀歴史民俗資料館（国指定重要有形民俗文化財「久賀の諸職用具」）、島根県松江市美保関町的美保神社（国指定重要有形民俗文化財「そりこ」「トモド」「諸手船」）、大分県佐伯市の佐伯市蒲江海の資料館（国指定重要有形民俗文化財「蒲江の漁撈用具」）の資料見学・調査を行った。

おわりに

現在、和船建造技術を後世に伝える会が所蔵している漁業関係資料については、順次整理作業を行い、それらの成果は、調査最終年度刊行予定の『和船建造技術を後世に伝える会調査報告書Ⅳ』の中で報告する計画である。富山県の漁業関係資料に限ってみても、クリーニングや燻蒸など未了の資料が多々あるが、今後の当会の活動のなかで活用に向けた整理作業を続けていきたいと考えている。

（文責 廣瀬 直樹）



収集したテンマ

上回りの状態は極めて良かったが、船底付近に朽損や部品の欠落がみられた。

写真の舷側板下部のナメイタは今回新造して補ったもの。



テンマの修理作業

腐りが入っている部分の最小限の部材を取り外し、外面から最小限の範囲をFRP（繊維強化プラスチックで押さえた（グレーの部分）。一部は新材の入れ子を施した。

また、船釘周辺の木質部の膨れについては、膨れを除去し、オガクズを混ぜたポリエステルパテで埋めた。現存する右舷側のナメイタは、船釘がほとんど切れてしまっていたが、新たに船釘を打つことには木質部が耐えられないと判断し、接着剤を使用して固定した。

